

路地空間の用途・形態と歩行者アクティビティの関係性に関する研究
- 大分県別府市・大分市中心部を事例として -

正会員 ○東郷 哲史* 姫野 由香**
同 小林 祐司*** 佐藤 誠治****

路地 アクティビティ 接道義務
セットバック 中心市街地 ヒューマンスケール

1. はじめに

近年、車を中心として計画された現代の道路とは異なった路地空間が見直されつつある。人間の感覚や動きに適合した空間の規模や物の大きさのヒューマンスケールで形成されている路地空間は、長い時間の蓄積によって人々の生活が溢れだし、様々なアクティビティに満ちた地域のcommonspaceとして、重要な役割を果たしてきた社会的空間である。これは、その都市の奥行きとなり、画一化された近代の都市空間に失われつつある。

そこで、本研究では路地空間の特徴を把握し、利用実態を明らかにすることで、路地空間のもつ魅力や地域における役割を明らかにすることを目的とする。

2. 本研究の位置づけ

対象地域として、市街地建築物法以前に形成された都市「大分県別府市」と、市街地建築物法以後に新たに都市が構築された「大分県大分市」を取り上げる。前者の中心部は戦災を受けておらず、長い年月をかけて形成された路地が網の目状に多数存在しており、後者は整理された都市内における路地の抽出が可能である。

既往研究¹⁾において、上述の2都市の中心部において路地空間¹⁾を調査により得られた路地の幅員²⁾、間口の用途割合³⁾、玄関の有無⁴⁾によって類型化している。本報では既往研究で得られた類型⁵⁾から路地空間を選定し、選定した路地空間においてアクティビティ調査を行い、利用実態を明らかにする。図1、2に研究対象地域と路地空間の分布を示す。

3. アクティビティ調査概要

路地での人々の利用実態を把握するためアクティビティ調査を行った(表1)。調査員は各路地の両端に1名ずつ配置し、路地空間内でのアクティビティ(表2)を網羅的に記録する。

調査で得られた結果を集計しプロット図を作成する。本報では、紙面の都合上、表住居系隙間型、表商業系隙間型、建物内路地の朝の時間帯のみを記載する(図3)。

4. 路地空間の利用形態

類型毎の路地空間の利用形態を表3に示す。

全ての類型で「移動」のアクティビティが高い値を示し、特に表商業系路地と建物内路地では「移動」のアクティビティが中心となっていることがわかる。

住居系路地では、商業系路地や建物内路地に比べ「生活行動」「社会行動」が高い値を示しており、路地空間がコミ

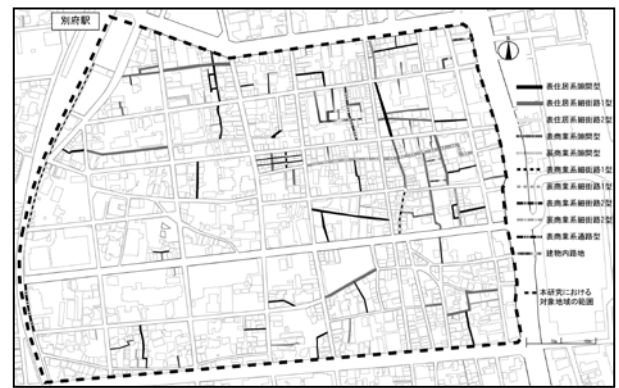


図1 別府市における路地空間の分布

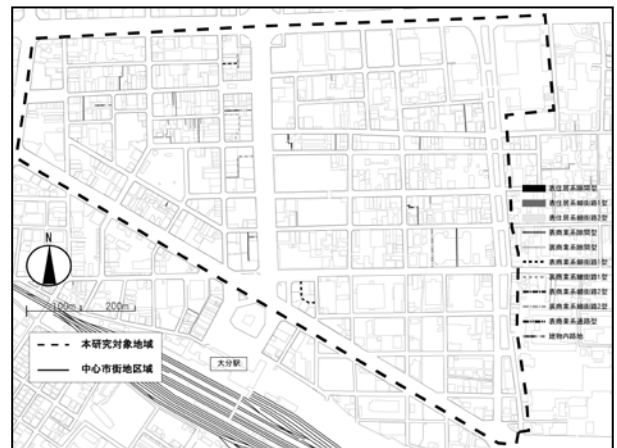


図2 大分市における路地空間の分布

表1 アクティビティ調査の概要

調査方法	アクティビティ調査
実施日	2009年11月26日、27日、12月2日、3日、16日
時間帯	朝(8:00-10:00)、昼(12:30-14:30)、夕(16:00-18:00)、夜(18:30-20:00)
天候	晴れ

表2 アクティビティの分類

分類	行動の種類
移動	turn, cross, in, out, through
生活行動	洗濯、ゴミ出し、花壇の手入れ、郵便物確認、掃除、開店準備
社会行動	会話、挨拶
その他	喫煙、チラシ配り、配達、工事

表3 類型毎にみる路地の利用形態

類型	移動	生活行動	社会行動	その他	合計
表住居系隙間型	60(61.2%)	15(15.3%)	20(20.4%)	3(3.1%)	98(100.0%)
表住居系細路1型	239(85.7%)	6(2.2%)	29(10.4%)	5(1.8%)	279(100.0%)
表住居系細路2型	80(64.5%)	23(18.5%)	18(14.5%)	3(2.4%)	124(100.0%)
小計	379(75.6%)	44(8.8%)	67(13.4%)	11(2.2%)	501(100.0%)
表商業系隙間型	353(92.7%)	15(3.9%)	7(1.8%)	6(1.6%)	381(100.0%)
表商業系細路1型	1753(97.8%)	7(0.4%)	13(0.7%)	19(1.1%)	1792(100.0%)
表商業系細路2型	435(93.8%)	5(1.1%)	16(3.4%)	8(1.7%)	464(100.0%)
小計	2541(96.4%)	27(1.0%)	36(1.4%)	33(1.3%)	2637(100.0%)
建物内	269(98.9%)	3(1.1%)	-	-	272(100.0%)

Research on relation between usage and form and pedestrian activity of alley space
-Case of Beppu city. And Oita city. Oita prefecture-

TOGO Satoshi, HIMENO Yuka, KOBAYASHI Yuji, SATO Seiji

コミュニケーションの場として利用されていることが分かる。特に幅員の狭い表住居系隙間型の「社会行動」の割合が20.4%と最も高い割合を示していることから、幅員の狭い路地においては、「社会行動」が発生しやすくなることが考えられる。

図3から、表住居系隙間型においては、路地内で様々な動線の種類、「生活行動」、「社会行動」が発生しており、通り抜けの動線が一度も発生していないことから、表住居系隙間型の路地は外部の人が入りづらい空間であることが考えられる。表商業系隙間型、建物内路地では、住居系路地に比べると動線の種類、「生活行動」、「社会行動」が少ないことが分かる。特に建物内路地において、通り抜けの動線が最も多いことから、建物内の路地空間は「移動」を目的として利用されており、公共性の高い路地空間となっていることが分かる。さらに、勝手口の近くで「社会行動」が多数発生し、植栽や洗濯機など生活要素などの近くで「生活行動」が多数発生していることが分かる。これらから、アクティビティの発生と路地空間の空間構成要素との関係性が伺える。

5. まとめ

路地空間のアクティビティは「移動」が中心となっている。しかし、住居系の路地空間では、単に路地を「移動」の目的として利用するのではなく、生活要素のあふれ出しによって、洗濯や花卉の手入れなど路地を生活の一部として利用し、あいさつや会話など地域のコミュニティの形成の場として路地が利用されていることが分かった。最も幅員の狭い住居系隙間型においては、この傾向が強く数値として表れ、1.8m以下の路地空間において、多数のアクティビティが確認でき、住民のコモンスペースと

して路地が利用されていることが分かった。しかし、このように地域のコミュニティの場として利用され、様々なアクティビティに満ちた幅員の狭い路地空間には、接道義務や防災面などの問題点は多く残っている。今後、これらの課題を克服し、現在のスケールを維持して、路地空間を継承していくことが必要であると考えられる。

補注)

- 1) 路地空間：本研究では路地空間を車道で囲まれた街区を貫く通路で、自動車が通り抜けられない通路と定義している。また、建物内の通り抜けができる通路や、行き止まりであっても複数の間口に面する通路も対象としている。
- 2) 路地の幅：路地の端点と中間点の3点を調査し、その平均から「隙間型(1.8m未満)」「細街路1型(1.8m以上2.7m未満)」「細街路2型(2.7m以上4m未満)」「通路型(4m以上)」として4つに分類した。
- 3) 間口の用途割合：間口の用途を住居系、商業系に分け、住居系割合が40%以上のものを「住居系」とし、40%未満のものを「商業系」として分類した。
- 4) 玄関の有無：玄関が1つでもある路地は「表、一つもなければ「裏」として分類した。
- 5) 路地空間の類型：研究対象地域の路地空間は、「表住居系隙間型」「表商業系隙間型」「裏商業系隙間型」「表住居系細街路1型」「表商業系細街路1型」「裏商業系細街路1型」「表住居系細街路2型」「表商業系細街路2型」「裏商業系細街路2型」「表商業系通路型」「建物内路地」の11分類にすることができた。

(参考文献)

- I) 東郷哲史, 清水弘樹, 姫野由香, 佐藤誠治(2010), 路地空間の保存・維持を目的とした建築基準法第42条第2項及び第3項適用の可能性- 大分県別府市・大分市中心部を事例として-, 日本建築学会九州支部研究報告集第49号, p309-312 有馬隆文,
- II) 金栄爽, 高橋鷹士(1995), 密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 469, 87-96
- III) 黒岩希美, 西野達也, 横堀肇(2007), 尾道の平地地区における路地空間の特性に関する研究, 日本建築学会中国支部研究報告集, 第30巻

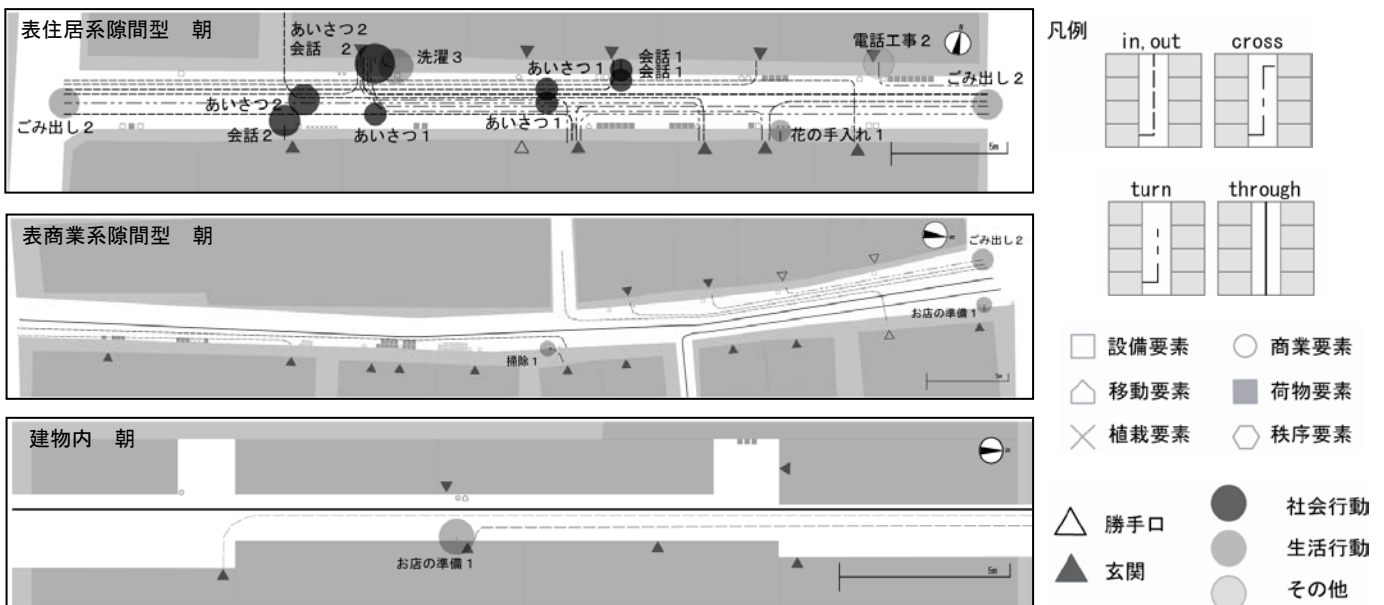


図3 プロット図

* 大分大学大学院工学研究科博士前期課程
 ** 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)
 *** 大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)
 **** 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 博士(工学)

*Graduate Student, Oita Univ
 **Research Associate Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., Dr.Eng
 ***Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., Dr.Eng
 ****Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng. Oita Univ., Dr.Eng